
今日も J I E I T A I は頑張ってます

秋月 実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日もJIEITAIは頑張ってます

【Nコード】

N7546V

【作者名】

秋月 実

【あらすじ】

某ブログでも連載中ですが、これはオリジナル版です。

これはこの世のあらゆる物と関係がありません。

平和大好き党が政権を取り、自衛隊は危機に瀕していた。軍隊嫌いの平和大好き党党首世園は、自衛隊に素手で紛争地帯に出向かせていた。テロリストに追い詰められた桜花中隊。そこに突如現れた、発光する鏡。そこに映るのは、草原とどこまでも続く道。

葛城二尉が叫び、鏡に飛び込む。

「ついてきて下さい！」

鏡は割れる事無く、葛城二尉を飲みこんでいく。
自衛隊は、紛争地域の平和を守る事が出来るのか？
素手で。

プロローグ

無知は罪なのか。愚かさは罪なのか。それは、人によって見解が分かれるところであろう。例えば、齢五歳の男児が、一歳の妹と共に留守番をしていたとする。そこに、男が現れ、男児に仲良くしよう、扉を開けてと囁いた。この世には悪人がある。それを知らぬ「無知」な男児は、喜んで男を招き入れた。男は強盗を働き、兄妹を殺して盗みを働いた。

その場合、誰が扉を開けてしまった男児を罪ありと断ずるだろうか。無論、悪いのは犯罪者であり、男児ではないのである。しかし、しかし、だ。確かな事が一つある。

罪が誰にあらうが、男がいつか捕まり罰されようが、強盗に殺された兄妹が生きかえる事は無い。

——桜井 透

二〇三五年。政界に激震が走った。俗に言う、ピーマン事件である。五十年政権を保ち続けてきた与党堅実党の党首、つまり日本国首相の須々木源助が、ピーマンが嫌いだという事が発覚したのだ。マスコミは、これを大々的に報道し、叩いた。首相どころか、人間失格とまで断じ、国民はそれに同調した。

そこに台頭して来たのが、平和大好き党である。平和大好き党の党首、世園栖輩は、愛と平和を高らかに謳った。もちろん、ピーマンも大好きだと宣伝した。マスコミは、これを歓迎した。

隣人と手を取り合おう。困っている人に援助をしよう。大切なのは愛である。

そう訴える平和党大好き党に、国民は同調した。

ピーマンを拒絶した堅実党に対する嫌悪と、平和大好き党の名演説。

これにより、選挙の大勢は決定した。折悪しく、衆参同時選挙だったのも災いした。

確かに、マスコミは、須々木源助が非常に重要な同盟を結んだ事を、報道しなかった。

確かに、マスコミは、平和大好き党の政策を実現させた結果、何が起るかを報道しなかった。

罪は、ピーマンを嫌った須々木にあるのか。自己犠牲による無償の愛に日本を巻き込んだ世園にあるのか。「無知」だった国民か。強い権力を持ちながら、一つの勢力の味方をしてしまったマスコミか。

確かな事が一つある。政権が平和大好き党に掌握された事で、今、自衛隊は死地に追いやられていた。

とある紛争地帯に、その隊はいた。隊の名は桜花中隊。総勢二百五十人の大部隊である。

ただし、全員、素手である。武器の携帯は許されていない。

世園は、自衛隊が嫌いである。愛と平和の世界に、軍隊など必要ないと思っているからだ。それに、金が必要でもあった。

世園は、他国や生活保護者の支援を大々的に行う為に、軍事費を殆ど、災害対策費を全て、その他もしもの為に堅実党が堅実に積み立てていた資金を全て使った。

無からお金が湧いて出る事は無い。国にとっての「隣人」である隣国や、様々な理由で働けない人（この中には外国人で日本語が出来ないと言う者も含んでいる）に手を差し伸べる、つまり援助をする以上、その資金を調達せねばならないのは当たり前である。

しかし、他国を支援するのが大好きで、自衛隊に日本にいてほしくない世園にとって、危険地帯への海外派遣を断るという選択肢は無かった。

そういった事情から、桜花中隊は素手で、治安の非常に悪い場所に派遣されていた。

銃声が鳴り響く。

銃に対し、素手の人間はあまりにも無力であった。

どんなに訓練を積んだ自衛隊員であっても、出来るのは粗末な施設に立てこもるだけだった。

「畜生、畜生、畜生！」

「葛城二尉、落ち着け」

建物に逃げ込んだ自衛隊員達は、即席のバリケードを作っていた。一人が、喚き続ける。葛城二尉だ。家柄もよく、普段おとなしい彼は、人目もはばからず喚いていた。

「何が専守防衛だ！こんな危険地帯に、武器も持たせずに放り出して！」

悔しい。悔しい。悔しい。葛城二尉は喚き続ける。死は覚悟していたが、こんな死は想定していなかったのだ。自分達は、何のために自衛隊に入ったのか。日本国を守る為ではなかったか。

何故自分は名前すら知らなかった国の紛争地域に武器なしで飛ばされ、殺されねばならないのか。自分だけではない。仲間達がここにはいる。仲間達だけでも、助けたかった。

喚き続ける葛城二尉に、優しく話しかける者がいた。

「そんなに、悔しいかの」

唐突にかけられた聞き覚えのない声に、葛城二尉は顔をあげる。

葛城二尉は副隊長だった。それゆえ、二百五十名、全ての顔と名前、声を覚えていた。そのどれにも一致しない声。

透けている白髪の老人が、葛城二尉に笑いかけていた。

「ひっ」

葛城二尉は後ずさる。死神が来たのかと思った。しかし、すぐに言い返した。

「く、悔しいさ。悔しい。こんな所で死にたくない」

「力が欲しいかの。お前さん達だけの武器が」

老人の言葉に、間髪いれずに葛城二尉は答える。

「その為なら、悪魔にだって魂を売ってやるさ！ あ、売るのは俺の魂だけだからな」

そこで、老人は笑った。

「わしは悪魔では無いよ。単なる命を持った鏡、妖怪に過ぎん。そしてお主はその使い手じゃ。……わしは嬉しい。使い手が、このように極上の霊気を持った男だとはのう。さあ、仲間を救いたいのなら、わしを使いこなして見せるがいい。ま、わしは鏡じゃから、戦いにはむかんの」

老人がすうっと消えて行く。その後には、大きな鏡があった。

それは、葛城二尉の蔵にあった、家宝の大きな鏡があった。異世界へと通じるという伝説の鏡。葛城二尉は、幼い頃いつもその鏡に手を置いて、漫画本片手に話しかけていた物だった。

「どうした、葛城二尉！ 狂ったか！？ な、なんだこの鏡。こんなものはなかったはずだ……」

中隊長の桜井三佐が鏡を見て訝しげな顔をする。

葛城二尉が恐る恐るその鏡に触れると、体の中を何かが蠢いて鏡へと殺到した。そして、鏡が発光する。凄まじい光だった。

「ふおっふおっふお。老体にはきついわい」

老人の声が聞こえる。光が収まると、鏡は緑の地を映し出した。

「中隊長！ 行きましよう、ついてきて下さい。早く！」

そして葛城二尉は迷わず鏡の中に飛び込んだ。確信があった。この扉を通れば助かる！

「おい、待て、葛城二尉！？ くそっ皆、鏡の中へ入れ！ 撤退だ！」

自分でも頭のおかしい事を言っているとわかるが、他に方法は無かった。

自衛官達は驚きながらも鏡の中へ次々と飛び込んだ。

鏡に飛び込んでも、鏡は割れなかった。それは、まるで粘性のある薄い水の膜を通ったのと同じような感触だった。

顔に感じる、風。見渡す限りの草原と、その中央を通る真っ直ぐな道に、目を見張る。すぐに後から後から人が来て、葛城二尉は慌てて邪魔にならない場所に移動した。といっても、鏡と葛城二尉は

見えない力で繋がっている。離れない方がいいだろうと本能的に感じ取ったので、鏡の裏に回った。

顔をあげると、太陽。決定的な違いは、太陽の横の小さな衛星だった。

「葛城二尉、ここは……？」

「……」

桜井中隊長の言葉に、葛城二尉は沈黙した。無視でなく、考えを整理する為だった。今、葛城二尉は必死で頭を回転させていた。

伝え聞いた伝承。小さな衛星を持つ太陽。子供の頃、漫画を片手に毎日話しかけていた事。

そうしている間にも、葛城二尉の体から、蠢く「何か」は鏡へと移動し続けていた。

そろそろ、無くなりそうだ。けれど、これが無くなれば道が閉じると知っていた。途切れないように、力を振り絞る。

「葛城二尉、顔色がわるいぞ、どうした」

中隊長の桜井三佐が聞いてくる後ろで、最後の隊員が草原へと降り立った。

それを確認して、葛城二尉は気を失った。

？

一話 誕生！ J I E I T A I 流 K A R A T E

家宝の鏡に、語りかける少年。幼い自身を、後ろから見守っているのだとすぐにわかった。

「ねえ、ねえ。夢扉。僕、強くなる、凄く強くなるよ。だから、僕が大人になったら、連れて行ってね。必ず連れて行ってね。この…」

葛城二尉は、全力で少年の口を塞ぎ、叫んだ。

「安全な世界希望！」

がぼっと起き上り、バランスを崩して落ちそうになった。葛城二尉は、桜井三佐に担がれていた。

「驚くから、急に起き上るな！」

「中隊長……？　ここは、一体……」

「俺が聞きたい。少なくとも、地球ではないようだがな！　とりあえず、降りろ」

桜井三佐が、半眼で告げて、葛城二尉を降ろした。中隊長自ら背負うとは、人の良い人である。

馬の歩くような音が聞こえてそちらに目を向けると、三つ目のトカゲ頭で全身が鱗だらけ、しかし体型は馬と言う謎の生物が馬車を引いていた。

ファンタジーの冒険者のコスプレをしているとは思えないよう

な者達が馬車の周囲を固めており、さらに後ろに桜花中隊が続いていた。

「畜生……！ 子供の俺の馬鹿野郎！」

葛城二尉は地面を叩く。

馬と言えいいのか竜と言えいいのかわからない謎生物や、コスプレ集団、太陽を巡る衛星。見覚えがあり過ぎた。小さい頃に大好きで、よく鏡に連れて行けと願った、凄く危険な少年漫画である。

「いいから、話せ。命令だ」

桜井三佐の言葉に、葛城二尉は微妙に顔を逸らす。

「い、言っても怒りませんか？」

「安心しろ、どちらにしろ怒る」

笑顔の桜井三佐に、葛城二尉は観念して答えた。

「む……昔、少年漫画「中二ラブラブ」で連載されてた、「迷宮バズーカ」の世界です。ここ」

葛城二尉がぼそつと言った言葉に、何人かが反応した。

「中二ラブラブってまたマイナーな……」

「なんだ？」

「ずっと昔にあった雑誌だよ。迷宮バズーカは俺も読んでた……っ

て、ええ!？」

桜井三佐は、眉をあげた。

「漫画の世界に來たと言うのか？」

「わかりません。酷似していると言う事は確かです。あの鏡は我が家の家宝、夢扉。子供の頃、異世界へ誘うという伝説を信じて、いつも願ってました。迷宮バズーカの世界に連れて行ってほしい、と」

「戻るか？ 一応、鏡は担がせて持ってきたが」

桜井三佐は、厳しい表情で言う。

「鏡があるなら、恐らく……。ただ、今すぐは無理です。全員通れる分の道を開ける為には、かなり多くの力を溜めない。ゲームのように、一度眠れば全快するという物ではないようです」

それに、ほっとした雰囲気が出る。

「とにかく、迷宮バズーカの内容を話してみろ」

桜井三佐に促され、ぽつぽつと葛城二尉は話し始めた。

迷宮バズーカとは、その名の通り迷宮物である。

主人公は、バズーカのような高威力を持つ魔法使い、バズーカ。魔物を、財宝を生み出す不思議な迷宮、アトランティスでの成長物だ。

迷宮に夢見てやってきたありきたりの少年が、最後には、迷宮の破壊をもくろむ、迷宮から生まれ出でし至高の魔物、リブとの戦いに勝つ。そんな物語である。

ちなみに、葛城二尉は子供の頃、リブを助けたいと思っていた。彼はただ、殺される為だけに魔物が産まれ続けると言う状況を、許容できなかっただけなのである。

最終回でリブが殺された時は、泣きじゃくった物だった。

だからと言って、これでリブが助けられるやったあ！とは思わない。欠片も思わない。何故なら、掛かっているのは仲間の命であり、我が身の安全だからだ。

リブや意志ある魔物達は、漫画のキャラだから魅力的な人物だが、実際にいたら犯罪者で異常者で危険人物なのである。

大体話した所で、馬車が止まり、馬車の上の人間が声を掛けてくる。

「ここで一旦、野宮の準備をしましょうか。武器一つ持っていない秘密の軍隊さん」

薄い金髪の綺麗な女の人が、声を掛けて来て桜井三佐は頷いた。

「野宮の準備だ！」

桜井三佐が声をあげると、それぞれ荷物を降ろした。

五十人目辺りから、鏡を通る者が荷物を持って来ていたのだった。平和大好き党は武器は持たせてくれなかったが、食料だけは持たせてくれた。

と言っても、格安の……例えば、農林水産省が色んな関係で買い取った、本来食用ではない米とか、問題のあった地域の鳥とか、そんな物を原材料とした食べ物なのであまり信用は出来ないのだが。とにかく、量だけはある。

食事をしつつ、事情を聞いた。

「あの、彼女は……」

「あれは迷宮アトランティスに、生徒を送り込む為の馬車だそうだ。彼女は教師。一応、俺達がある国の軍隊で、気がつくところの場所にいたので近くの町まで連れて行ってほしいとだけ告げてある」

「よくそれで納得しましたね」

「武器一つ持ってなかったからな。呆れていた」

葛城二尉は、馬車のメンバーを注意深く観察して、桜井三佐の袖を強く引っ張った。

視線の先には、小さく丸まった小柄な少年と、勝ち気そうなミニのローブ姿の女の子。

「な、なんだ」

「アレ！ アレ！ 主人公！ バズーカ！ 隣にいる女の子がフレイで、ヒロインです」

ぼそぼそと囁けば、桜井三佐は目を細めた。

「あれが……」

そこで女教師が、微笑みながら桜井三佐の隣に腰かけた。

「明日の昼頃には、迷宮都市アトランティスにつきますわ。その後、どうするおつもりですか？」

「帰れる目処がついたので、しばらく休養してから帰ろうと思います。アトランティスには、日銭を稼げる場所がありますか？」

その言葉に、女教師はふむ、と頷く。

「二百五十人もの大所帯ですし、迷宮以外にないと思いますわ。あそこには、一文無しの人もよくやって来ますから。神殿で祝福を受けるのも、迷宮に入るのもタダですし」

「迷宮に入るのが、タダでいいんですか？」

「いいんですよ。アトランティスは大迷宮。百年に一度の魔物の大発生時には、外にも魔物が溢れるほどです。だから、冒険者はなるべく増やすようにしているんです」

桜井三佐がふむふむと頷くが、葛城二尉は顔を蒼腿めさせて、首を横に振っていた。

「どうしたんだ、葛城二尉？」

「やばいですよ、アトランティスの魔物は上階層でも強いです」

「しかし、他に方法は無い。せめて宿代位は稼がなくては」

二人で押し問答していると、ミニのローブ姿の女の子が、呆れたように声をあげた。

「あんた達、なっさけないわねえ。仕方ないから、あたしが迷宮で守ってあげる。私、戦闘成績一番だったんだから！」

「お願いします」

桜井三佐は、間髪いれずに頭を下げた。

主人公の近くにいるなら、安心だろうという考えだ。

「ふっふーん。師匠と呼びなさい！」

「はい、師匠」

「よろしい！　ではまず、迷宮に出る一般的な魔物について教えてあげるわ！」

「あら、まあ」

女教師はクスリと笑う。しかし、桜井三佐は真剣だった。

この世界に放り出された自衛隊員には、他に頼れる者がいなかったのである。それに、装備に恵まれない自衛隊にとって、地元と仲良くする事は身を守る上で絶対に必要なスキルなのだ。

翌日の昼。一行は予定通り、迷宮都市アトランティスについていた。

迷宮を抱えると言う性質上、本来周囲に築くべき防壁は内側にある。

迷宮をいくつもの防壁で囲っているのだ。

そして、その外側には大きな神殿があった。

「ほおー」

桜井三佐は思わず声を上げ、葛城二尉も思わず目を輝かせずにはいられなかった。

子供の頃、憧れた世界にいたのだと実感したのである。

町の入り口で、名前と年、性別を書いて入る。

入った町は正しく異世界で、立ち並ぶ変わった店を眺める。

特に食べ物が変わっていて、あちこちにある露店ではいい匂いのす

る不思議な物体が売られていた。

「ほらほら！ あんた達、無一文なんだから、さっさと神殿に行くわよ！」

「あの、まずは神殿で加護を貰った方がいいと思います。僕達も、これから加護を貰うんです」

フレイとバズーカに言われ、桜井三佐達は足早に神殿へと向かった。

加護とは、その名の通り戦いの神から貰える特殊能力である。

そもそも、迷宮は戦好きの神が作った物なのだ。神は、自分を楽しませてくれる者達に、あるいは加護を、あるいは財宝を与える。

自衛隊員達の胸は、自然高鳴った。

綺麗に磨かれた神殿。白い石で出来たその神殿には、いくつもの冒険者の像があった。

入口の神官に、フレイは声を掛ける。

「すみませーん！ 私達、ご挨拶と加護をお願いしにまいりました。後ろの人達、無一文なんで、寄付は後にさせて頂けますか？」

「神殿は誰にも開かれていますよ。どうぞ、お通り下さい。加護を受けるなら、この道を真っ直ぐ行って、そこにある列に並んで下さい」

「ありがとうございます、神官様」

神殿では、十程の列が出来ていた。

桜井三佐の順番が来て、神官は人の良さそうな笑みを浮かべ、桜井三佐に問うた。

「では、貴方はどのような加護を求めますか？」

「素手で出来る物で、適性が一番ある奴を！」

「素手で、ですか……」

神官は、困ったように笑う。そんな事を言ってくる者は初めてだったからである。

それでも、神官は祈ってくれた。

桜井三佐も神になんとかいい加護を授けてもらえるようにと祈っている、唐突に頭に何者かが入ってきた。何者かが、笑った気配。

——面白い！ 面白い！ 確固たる意志を持つ魔物か。未来を知る異界の軍人よ。面白い物を見せてもらった対価に、お前達に相応の職を用意してやろう……。武器は素手でも、服ぐらいは凝ってもよからう？

桜井三佐は、体に注ぎ込まれる何かに目を見開いた。

そして、頭に流れ込んでくる、自衛隊員達のアニメやゲーム、漫画の記憶であろう情報が滝のように流れて来て、困惑するのだった。神官は、驚いた様子でその様子を見守っていた。

「まさか、新規職の誕生に立ち会えるとは……。お礼を言わせてもらいます。ありがとうございます」

「こちらこそ、加護を受けさせて頂き、ありがとうございます」

二人は、互いに深々と礼をする。

桜井三佐の胸には、戦いの神の紋章が刻まれていた。

二話 帰還

新規職。聞かずとも、その内容はわかった。その名も……ヒーロー。体内に、力がたゆたっていた。この使い道を決めるのは、自身である。

ゲームで言う、ステータス振りのようなものだろうか。

新規職。それは、聞き様によっては素晴らしい物だと思う事だろう。しかし、そもそも職とは先人達の途方もない努力により編みだしてきた、もつとも効率のよい力の使い方なのだ。だから、古い職の方が洗練されているのは当然と言えた。

その上、ヒーローにはスキルアップ以外の自動ステータス振りの機能が付いていなかった。自由であるとは、試行錯誤しなくてはいけないと言う事である。

さて、ヒーローには、取得スキルがいくつか用意してあった。

J I E I T A I 流 K A R A T E、J I E I T A I 流 N I N P O U、J I E I T A I 流 I J Y U T U の三つである。その上、その三つは基礎的知識を必要とした。

ヒーローの難易度は、存外高いのかもしれない。

神殿の前に自衛隊員達が集合すると、フレイとバズーカがへこんだ様子で現れた。

「あたし、魔法使いになる為に、一生懸命頑張ってきた。なのに、なのに……どうして却下されるのよー！」

「僕、剣士になるはずだったのに……」

落ち込んだ二人が、恨めしく桜井三佐を見てくる。この展開は、原作でもあった事だ。桜井三佐が、笑顔で告げる。

「私達は全員ヒーローという新規職でした」

「えええええ！？ それ、とんでもなく無謀じゃない！」

フレイが声をあげる。

「え、凄い事なんじゃ？」

わからないと言う風に声をあげるバズーカに、フレイは呆れた声をあげる。

「職って言うのはね。人間と戦いの神様が、どうしたら効率的に強くなれるだろうってつきつめて研究して来た、究極の形なのよ。つまり、古ければ古い程優秀なの」

「まあ、これから頑張ります。訓練所で少し訓練をすれば……」

「ばっかねえ。訓練所は有料よ。無一文のあんた達は、このまま迷宮へもぐるよりしょうがないのよ。食事したら、行くわよ」

フレイの言葉に、桜井三佐は肩を落とした。

しかし、悲しいかな。厳しい現実は変わらない。

バズーカとフレイは、自分達の為に女教師達と別行動をしている。生きて行く術を手に入れると言うだけでなく、それに報いなくてはならなかった。

食事を広げて、葛城二尉にどれを取得したらいいか、意見を聞く。もちろん、バズーカとフレイに聞こえないようにだ。

葛城二尉は、考えた末に、告げる。

「無理にスキル習得する必要はないと思います。提示されたスキル

とは、飽くまでこうすればこう言う事が出来るというヒントにしかすぎません。むしろ、適性が低い者がいたら、その人は他のスキルを「編みだす」事を優先すべきです。作中に、フリーダムと言う新規職が存在します。それは、全て自分で決めると言う職でした。それは結果、かなりの強敵を作りだしていますし、主要キャラは例外なく独自スキルを編みだしてます。ただ、今は時間がありません。一から編みだしていたらその間に死んでしまいます。一番高い適性の既存スキルを選ぶのが最善かと。修行法については覚えてます」

葛城二尉の言葉に、桜井三佐は頷いた。そしてまず、適性について調査した。

衛星兵が全員JIEITAI流IJYUTUの適性があった事には驚いたが、好都合だ。

他の者も、JIEITAI流KARATEの適性を有していた。これは幸いと言えるだろう。フレイとバズーカのように、努力していたのと別の方向に才能があると言うのはありうる事なのだから。

JIEITAI流NINPOUについては、適性を持つ者が少なかったので、そちらの適性を持つ者はそちらを優先してもらう。

思い切って班を再編成し、迷宮へと向かった。

鏡や荷物の護衛に、小隊を一つ残して出発する。葛城二尉も、居残り組であった。

迷宮は、立派な門だった。薄い光の膜が張っている。恐らく、ここに入るのだろう。

葛城二尉の夢扉と同じような物なのかもしれない。門番である神官に、ぽかんとされた。

「そ、そんな大人数で行くなんて馬鹿じゃないか？ それでは……」
止めようとした神官が、体を震わせた。

「なんと……神から、荷物は預かるから全員で行けと指示が来た。行くが良い」

色々親切な神である。

桜井三佐は深々と礼をして、残した小隊を呼びに行かせた。光の扉を潜ると、そこは広い神殿だった。

「凄いわ……」

フレイは思わず呟き、バズーカもこくこくと頷いた。フレイとバズーカは、武器を交換している。

「よし、調べるぞ」

桜井三佐が指示を出す。葛城二尉が、声をあげた。

「ほ、報告！ 前方に敵発見！」

全員に緊張が走る。

人の大きさほどもある大きなカマキリが、こちらを見ていた。

しかも、それは一体ではなかった。

十匹ほどいるのではないか？

「あ、現れたわね。バズーカ、約束よ。私が殺される前に、魔法を放ってね」

バズーカはショックを受けた顔をしてフレイを見た。そして、自分の両頬を叩く。

「フレイ、どんな形だろうと、僕は君を守ります！」

そして、呪文を詠唱する。

「くそ、小銃が恋しい」

言いながら、桜井三佐は前へ出た。女の子が戦おうと言うのだ。自衛隊である彼らが戦いに出ないわけにはいかない。

桜井三佐は、全加護をスキルと身体能力強化に注ぎ込んだ。適性があったし、誰かがそうしなくてはここを切り抜けられない。

自作スキルに対する憧れは確かにあったが、今必要なのは生き延びる事なのである。

そして、戦闘が始まった。

フレイは、カマキリに駆けよって、全身を使って剣を横に振る。

その先制攻撃は、見事にカマキリの首をはねた。

剣に振り回され、たたらを踏むフレイ。

彼女の隙を見逃すカマキリではない。

振りあげられた刃。桜井三佐は、思い切り地面を蹴り、回し蹴りをしていた。

隣にいたカマキリまで巻き込んで、吹っ飛ぶ！

「よし、いける！」

そして乱戦が始まった。

後から後から現れるカマキリを片付けていると、現れるのは怪獣のような大きさのカマキリ。

「こ、これは……ボスカ!?!」

「ファイヤーボム！」

その時、バズーカの呪文が完成した。
現れる特大の火球に驚く一行。

「馬鹿な！ まだレベル一でこれか！？」

それは、過たずボスカマキリの胸を貫き、全身を焼きつくした。
バズーカは肩で息をしている。

「こ……これ、で、加護切れです」

「はやっ！？」

そう言いつつも、残ったカマキリを掃討する自衛隊員達。

戦いが終わると、力が増えるのを感じた。レベルアップしたのである。

一旦休憩すると、探索へと戻った。

そうやって、探索する事しばし。

部屋を見つけて、そこに入る。あつたのは、宝箱の山。その数、
252。

「これは、一人一個開けよと言う神様からのご指示だな。神に感謝
して、開けるか。総員、配置につけ」

自衛隊員達が開けた宝箱の中には、バッチと服、幾ばくかのお金
が入っていた。

「これで、今日の宿には苦勞しないで済むな」

思わず安堵のため息をつく。着替えが手に入ったのも、嬉しい事
だった。

「大体わかった。では、撤退して宿を取ろう。この後は、小隊ごとに迷宮で研鑽を積んでくれ。葛城二尉は回復を優先するように」

一か月ほど、自衛隊員達は修行をした。

異世界の露店は、非常に面白かった。

服は鑑定してもらった所、少しいいが普通の装備品、バッチはかなりの魔力を秘めた品だと言う。バッチはずっと大切に持つ事にしたが、服は既に何度か新調している。

ようやく世界に馴染んだ。そんな時、葛城二尉の霊力が全快したと報告を受けた。

自衛隊員が広場へと集まる。フレイとバズーカには、既に別れの言葉を告げていた。

鏡に、葛城二尉が触れる。

ぼう、と鏡が光り、葛城二尉の実家を写しだした。

帰れるんだ。そう思った時、桜井三佐の目から涙が零れおちた。

安堵？ 寂しさ？ わからない。だが、帰るのだ。ここは自衛隊員達のいるべき場所ではない。

鏡へ次々と飛び込んでいく自衛隊員達。

葛城二尉は、最後に鏡を潜る時、振り返った。

「案ずるな。座標は覚えた。いつでも来る事が出来ようの」

鏡が喋り、こくりと頷いて葛城二尉は鏡を通った。

抜けた先では、父母が慌てておもてなしの準備をしていた。

葛城二尉を見て、頭を叩き、そして抱きしめられる。

「心配したんだから……！」

葛城二尉は、ひたすら謝るほかなかった。

三話 専守防衛クラブ

?

桜井三佐は電話で報告を終えると、缶ジュースを一気に飲んだ。

「あの、中隊長。どう報告しました？」

「神隠し。事実だしな。気が付いたら日本だったと言った。すぐに迎えが来るそうだ」

ぶっきらぼうに桜井三佐は答える。彼は怒っていた。桜花中隊は、全員事故死していたと家族に伝えられていたからだ。更に、基地の人間に問うと、テロリストに全員殺されたと判断。死体の搜索すら行ってくれなかったらしい。

唯一、米軍基地と当事国からはお悔みの言葉と品を貰っていたと知り、それがさらに、味方は自国にいないのだと思わせた。

なんにせよ、迎えが来て、彼らは帰った。

基地につくと、隊員達は心底ほっとした顔をした。

桜井三佐も表情が緩む。

「どこに行っていた。無事ならすぐに戻ってこんか……！」

泣きながら叱って来る上官の機嫌を直すべく、桜井三佐は荷物を差し出す。

「はっ申し訳ありません！ 向こうの食事を食べながら報告致します！」

「向こうの食事とはなんだ」

差し出された荷物を開けて、上官は変わった食べ物に驚いた。虹色模様の果実など、初めて見たのだ。

「妖怪の国でも行っていたのか？」

そして、食事をしながら事情説明をする。

その後すぐに、自衛隊基地から、「迷宮バズーカ」の大量発注が為されたのは言うまでも無い。

桜井三佐達の持ってきた物は、興味深い物ばかりだった。

ふとっぱらな桜花中隊は、今使っている装備品とお金以外は全てをお土産として提供してくれた。お金ですら、記念に一部分けられた。

更に、向こうで手に入れた技の披露。外でやれという声。

にぎやかになる食堂。そこに、誰かがつけたテレビから政府の発表があった。

『桜花中隊は何事も無く帰還しました。次の人道派遣先は……』

その言葉に、隊員達は固まる。それは更なる危険地帯だった。

「……政府め、本気で殺す気か」

「口封じされる可能性も考えないといけないかもな」

生き延びねばならない。次の総選挙まで。

桜井三佐は、葛城二尉を呼んだ。事は桜花中隊だけではない。

自衛隊自体の、戦力底上げが必要だった。

だから、立ち上げることにした。

「専守防衛クラブを開設する。力を貸してくれ、葛城二尉。日本の、いや、俺達の未来の為に」

「はっ了解しました！」

「宗像二尉！ 読心術、使ってもらおう事となるぞ」

「キキキ……了解すよ」

宗像二尉のスキルは、心眼というスキルを編みだしていた。

これは最大範囲百メートルの生き物の心を読むと言う力で、このおかげで奇襲というものと縁が無い。一か月、そのスキルのみをあげてきた成果だ。

諸刃の剣ではあるが、強力なそれを、桜井三佐は頼みにしていた。そして、一週間後。あまりにも短期間に、追い出されるように、彼らは次の駐屯地に派遣されていた。

車で現地に移動している最中、宗像二尉が声を出す。

「キキキ……バズーカ持った敵が接近中つと」

「私が行ってきます。小隊長、位置を」

「おう、林。相手に一撃撃たせるのを忘れんなよ、俺らは専守防衛クラブだからな、キキキ」

「ご安心を。反撃するつもりはありません」

宗像の部下の林一士。制服の上に、忍び服を着こんだ男。彼は、JIEITAI流NINPOUの使い手だった。宗像二尉の部隊は、どちらかというとき色ものの能力者が多い。

彼は窓から屋根の上上がった。

宗像二尉の言った通り、バズーカを持った男達が車に乗って近づいてくる。

「JIEITAI流NINPOU……。身代わりの術」

バズーカが撃たれたその瞬間、車と車の位置が入れ替わった。

混乱するテロリスト。そこに、自ら放ったバズーカが着弾する。

「経験値……人間相手でも入って来るものですね」

ガタガタ揺れる車の上で、飄々と林一士は呟いた。

そして、一ヶ月後。

「JIEITAI流KARATE！ あたたたたた！」

銃弾を次々と素手で撃ち落とす桜井三佐。

「変身！」

俺が考えた格好良いポーズで変身して突っ込んできたトラックをふっ飛ばす、松永一士。

「キキキ。あっちの子供。小さいながらに立派な戦士だぜえ？ 銃を隠し持ってるな」

片っ端から相手の作戦を見破る宗像二尉。

「その君！ 怪我をしているじゃないか。JIEITAI流IJYUTUを受けてみる！」

巻き込まれた非戦闘員の傷を癒して行く御手洗二尉。

「皆頑張れー」

守られるがゆえにレベルアップできず、未だに弱いままで旗を振る葛城二尉。

大活躍の桜花中隊が、某動画サイトに中継されるのに、長い時間は掛からなかった。

最初、それはCGだと思われ、それでも視聴者数をちやくちやくと増やしていた。

しかし、その紛争地帯のマスコミが自衛隊取材したことで、話は変わった。

強さの秘密を問われ、はきはきと桜井三佐は答える。

「上司が素手で戦えというからです！ 銃無しで銃を持った相手に対応する為、それ相応に強くなりました！」

そのマスコミは、自衛隊の予算や給料を削減されたり、武器一つ持たせないで放り出されたり、テロリストに襲撃されて行方不明になった事を事故死と処理されたり、と言った事を調べ上げて放映した。また、自衛隊員達の凄まじい模擬戦を取材した。

自衛隊員達が取材だからと張り切って戦ったので、宝箱が出現した。

「おっ宝箱出たぞ！」

一瞬取材を忘れ、嬉々として宝箱を開ける自衛隊員。

マスコミは、あんな箱、いつのまに転がっていたのだろうと思いつながら箱の中身を覗く。

「ああ、これはスポンサーからの贈り物です。たまに送ってくれるんです」

中に入っていたのは、虹色模様の果実の山。

それに齧り付く自衛隊員の笑顔は、輝いていた。

このニュースは、瞬く間に日本以外の世界に広まり、現地にはマスコミが押しかけた。

神隠しにあった中隊として一気に注目を受け、防衛省にも取材が入った。

英語のニュースを見ている国民は、自衛隊の惨状に声も出なかった。

国会でも野党が必死に攻勢を仕掛けるが、両院で過半数を取られていては、何も出来ない。

そこで、海外ニュースを翻訳して、動画サイトに流す猛者が現れた。それは一気に有名になり、マスコミも報道せざるを得なくなる。動画サイトでは、自衛隊への称賛と驚きのコメントが溢れかえった。

動画サイトに対する某掲示板での反応は、少し違っていた。

「これ、CGじゃないの？ どうみてもCGだよね」

「自衛隊すげー！」

「実際に報道されたニュースだよ。釣りじゃない。各国が競って報道してる」

「なんか、神隠しにあってからこんな事が出来るようになったんだってさ」

「自衛隊かこいい」

「神隠し？」

「テロリストに襲われたって言葉を最後に消息を絶って、いきなり日本に現れたんだって」

「事故じゃねーの？」

「それは建前。ほら、自衛隊に死者を出したってなると色々問題が起きるだろ」

「あの虹色の果実はなんなんだ……。だれがどう見ても新種じゃね？」

「それ以前にいきなり宝箱が現れた件について」

「宇宙人にでも誘拐されてヒーローになって戻ってきたんじゃないかというか変身してるし」

「軍事費大幅削減、給料削減、武器なしで紛争地帯に放りこみって何これ。もう殺人じゃないの、これ？」

「何それ知らない」

「平和大好き党が法案通したじゃん。災害対策費とか積立金とかと一緒に、海外への援助に回したじゃん。ほら、それに、日本だけ二酸化炭素大幅削減の法律作っただろ？ あれ、国の定めた分を超過した部分は、他国から買う事になってるんだぜ。ちなみに二酸化炭素と温暖化の関係については疑問視されてる上に、削減量が不可能

の域」

「あーあー、またネトウヨだよ。堅実党は負けたじゃねーか。くやしいでちゅかー」

「環境保護のどこが悪いんだよ。これだから自分の事しか考えないネトウヨは……」

「そんな法案通るわけねーじゃん」

「堅実党だって悪いじゃねーか。汚職とか、何よりピーマン嫌いなんだぜ？ 最低だよ」

「平和大好き党の方がずっと致命的な事してるじゃねーか」

「お前らスレ違い。どっかいけ」

次第に、平和大好き党一色だった国民が、目を他に向け始めていたのだ。これでも、堅実党の擁護者が増えた方なのである。

大半の国民は、平和大好き党も堅実党も嫌いになり始めていた。しかし、両方嫌いと言って選挙から離れてくれれば、平和大好き党の強力な信者が勝つ。怖いのは、堅実党が再び力を得る事である。大きな政党は二つだけ。結局、平和大好き党の敵になりえるのは、堅実党だけなのだ。

そこで、ついに政府が対策をせずにはいられなくなった。

政府を見かえし、対策を出させ、注目を得、人気も高まり、新たなスキルも考えるのが楽しくて……桜花中隊は、浮かれていた。

そして、政府はついに対策を大々的に発表した。

「自衛隊から国籍条項を削除し、人数を増やす！」

桜井三佐達は灰になった。解散総選挙まで後一年。しかし、それまでに自衛隊はのこっているのだろうか？ 甚だ疑問である。

三話 専守防衛クラブ（後書き）

あくまでもネタなので、実際の法律とはなんら関係がありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7546v/>

今日もJ I E I T A Iは頑張ってます

2011年8月25日16時33分発行